岩波文庫

66—67

幸福者

武者小路実篤作

岩波書店

昭和二年七月一〇日　第一刷発行　幸福者
昭和一三年八月三〇日　第一二刷改版発行
昭和四三年一二月二〇日　第三九刷　発行

定価★★

作者　武者小路実篤
東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行者　岩波雄二郎
東京都新宿区市谷加賀町一丁目一二番地
印刷者　高橋武夫

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本印刷・田中製本

岩波文庫
66—67

幸福者

武者小路実篤作

岩波書店

この書を岸田劉生兄に捧ぐ。

君の藝術に對する尊敬と、君のこの書にたいする理解に感謝して。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

幸福者

一

自分はこゝに自分の師の一生を書けるだけ書いておかうと思ふ。自分はこの書が、誰かに見られるか見られないかそれは知らない。又かやうなことは書くべきものか、かくべからざるものか、それも知らない。師がいらつしたら、書くなとおつしやるかも知れない、書けとおつしやるかも知れないが、しかしともかく自分は書かないではゐられない。自分のやうなものがかいても始まらないかも知れない。又自分は井のなかの蛙で何にも知らない人間だから師のやうな方はこの世に澤山ゐるのかも知れない。そして師のおつしやつたことや行はれたことはさう後世に殘す程のものでないかも知れない。

しかしともかく自分は師によつて救はれたものだ。師があつて自分の一生があるのだ、こんな片田舍で自分が師のやうな方にお目にかゝれたことをどんなに自分は幸福に思つてゐるか知れない。ともかくこの世で師のありがた味を本當に知つてゐるのは自分達僅かだけだ。そして自分が此のことをかゝなければ誰も他にかく人はない。自分がかくことによつて師のありがた味を少し

でも他の人に知らすことが出來、そのことがその人の一生にとつて私の上に行はれたやうな變化を少しでも行ふことが出來ればその人はきつと私が師のことをかいたことをよろこんでくれるだらう。さう云ふ人が何處かにゐる。自分はそれを信じてこの筆をとる。

何からかき出していゝか自分にはわからない。自分は師の若い時のことは少しも知らない。師は若い時の話をされるのをよろこばない。

ある人の話だと若い時に師は女のことでしくじりをして、それから家に居られなくなつてとび出して、あゝ云ふ生活を始められたのだと云ふ。どうしくじられたのかそれは知らない、ともかく師は女を恐れてゐられたことは事實だ。師はある時こんなことを云はれた。「女を愛するならば本當に愛しなければいけない。自分の運命と女の運命を傷つけるのを恐れなければいけない」

則ちその女と夫婦になれることを本當に知るまでは女の心を動かすやうなことをしてはいけない。自分は女を恐れるのは、自分と女の運命も傷つけることを恐れるのだ。それ以上に又神の教をきずつけるのを恐れるのだ。それから又師はある時私にかう云つた。

それは私が今の妻と結婚しようと思ふことを師にうちあけた時だ。師はよろこんでかう云はれた。「それはお目出たう。私もそれをのぞんでゐた、結婚は早すぎてもいけない、おそすぎても

いけない、無理が一番いけない、自然がいゝ。結婚したがるのもいけない、さけるのもいけない。來る時が來たら喜んでそれを迎へるがいゝ、戀はながくはつゞかない。それは人生には他にもつと大事な務があるからだ、女のことには一日も早く卒業するがいゝ、だがよろこびは味はへるだけ充分に味はふがいゝ。だがそれも無理してはいけない、與へられたもので感謝しなければいけない」

自分はその時、かう云つた。「先生は結婚なさつたことがおありになるのですか」

「ない。結婚したいと思つた時はあるが、私はうつかりしてゐる內に、相手は他にかたづいてしまつた」そして師は大きな聲を出して笑はれた。

「結婚するものも仕合だし、しないものも仕合だ、どつちにも人間のよろこびはある。馬鹿なものは獨身の間は結婚した時のよろこびを空想し、結婚すると獨身の時のよろこびを空想する。しかしそれは馬鹿だ、水を見た時は水の美しさを感じればいゝ、花の美しさを見た時はその美しさ許りに氣をとられるのが本當の人間だ、どつちでもいゝ、どつちにも美があり、よろこびがある。春もいゝが冬もいゝ、冬もいゝが春もいゝ。どつちもいゝ、冬は冬をたのしみ、春は春をたのしむ。かはりがはりに來れば、又それをたのしめばいゝ。自分は獨身のことを考へると獨身も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

よく、結婚すれば結婚も亦いゝ、自然に任せておく、無理してはたに迷惑をかける程のものではない。お前が結婚すればそれが嬉しい。お前が結婚しなければそれもうれしい。その爲に誰をも不幸にしないですめばなほうれしい」

自分はその時、自分の妻を戀してゐる男のことを思ひ出した、自分はその男を同情することも愛することも出來なかつた。そして反つてその男を淋しくすることにある快感を感じてゐた。自分はそのことを白狀した。師は一寸いやな顏をされたが、すぐ「それも仕方があるまい。その男がそれから墮落するとも、それはお前のせゐではない。それでその男が墮落せずに更によくなつたら、そのことは反つてその男にとつて幸になる。さうなればなほよろこびだが」

「結婚すると人間は駄目になるものでせうか」

「そんなことはない、それは失戀すると人間が駄目になると云ふのと同じ程度の話だ」

自分は餘計なことをかきすぎた。ともかく師は常に自分に與へられた運命によろこびを感じて生きて居られた。

師は他人にたいして多きをのぞまれなかつた、他人がいゝことをすることをよろこばれた、他人の幸福をよろこばれた、それが自分には貴く思へた。そして自分がやゝもすると他人の幸福を

猜んだり、呪つたりする傾きのあるのを情けなく思つた。自分は、師にそのことを云つた。

「それは仕方がない、若い内は自分もさうだつた。この頃は誰より自分が幸福だと云ふことを本當に知つた。だから他人のことは羨やましくは思はない。自分が他人をしのがうと云ふ氣がある間、自分が他人に負けるのをいやがる間、さう云ふ根性はなくならない。しかし氣にするな。又さう氣にも本當はしてゐないだらうが、そしてもつと大きい心を持つやうにする方がいゝ」

師は滅多に怒らない方だつた。すべて許す方だつた。

「俺は他人をせめることは出來ない、自分の内にはもつと恐ろしいものがあることを反省しないではゐられないから。自分の心のけがれを思ふのは情けないが、他人の罪に寛大になれるのはうれしい。しかしその爲に罪を罪のまゝ許すやうになるのは恐ろしい、自分のわるいことを本當に知つてゐる罪人は自分を正しいと常に思ひ込んで他人を責める人間よりはずつと幸福だ、その人は神の愛を知ることが出來るから、そしてありがたいとか勿體ないとか云ふことを本當に知ることが出來るから。この世に一番救はれないものは神にたいして不平をもつ奴だ」

師は又こんなことを云はれた。

「千ペン惡の種をまいて、惡の芽が出ないことを本當にありがたがるものは、千ペン善の種を

まいて、その芽が出ないでも神を呪はない。更に善の種をまかうとする。そしてその芽のいつか出ることを信じて、それを信じることが出來ることによろこびを感じる。そして惡の種をまくことの恐ろしさをます〳〵感じてくる。さう云ふ人間は救はれる。人間はある時には神になる。しかしその次ぎの瞬間には最も下等な人間にもなれるものだ。それと同じく最も下等な人間になり切つたことを本當に自覺した瞬間に人間は神にもなれるのだ。ある人を善人、ある人を惡人ときめるな」

自分はその時師にかう云つた。

「しかしこの世には、神になれない人間もあるでせう。私にはさう云ふ人の方が多すぎるやうに思へます」

「さう云ふ人はないとは云へない、しかしあるとも云へない。さう云ふことは自分達人間には云へない。本當に強い眞心をもつた人の愛の光りに照らされて見たら、存外に神になれない人と私達が思ひこんでゐる人間が神にならないとも限らない。それを知つてゐるものがあれば神だけだ。人間にはわからない」

師は小さい小屋に住んでゐられた。その家はある人が師に捧げたのだ。飯の世話は自分達が當

番をきめて、うちでつくつた飯をはこんだ。自分の仲間は六七人で、かはり番に飯をはこんだ。師は初めは自分で自炊してゐられた。そして他人の耕作を手つだつたり、或人からもらつた僅かの畑を自分でたがやしたりしてゐられた。自分達が飯を運ぶやうになつてからは師は自分の土地を近處の一番貧しいものに與へてしまはれた。時々手つだはれることはあつたが、一人で方々歩きまはられることが多くなつた。師はその時何か大事なことを考へてゐられるやうだつた。師が口をついて出る言葉は多く、瞑想から得られた。本も時々はよまれるやうだつたが、非常な學者と云ふわけにはゆかなかつた。耶蘇や、釋迦や、孔子やソクラテスを尊敬されてゐた。しかし本をよむよりは考へる方を好まれたらしかつた。學者はあまりすかれなかつた。自分が生かすことの出來ない程多くを知りすぎるのは師には害があつて益がないやうに思はれた。

師はどんな學者が來ても恐れずに、自分の思ふことをしやべられた。「笑はれるのを恐れるよりは心にないことを云ふのを恐れなければいけない」

師はそれを實行された。師は心にないことは一ことも云はれなかつた。むしろ師の心には云ひたいことが多すぎた。師の内にある貴い言葉は、出る機會を得ずに、沈默の内に葬られた言葉がどんなに多いだらう。又よしその言葉が機會を得てあふれ出たにしろ、その言葉の價値をそのま

ま受け入れたことは殆んどないであらう。自分はそれをすまなく思つてゐる。

師はかう云はれたことがある。

「福音書は耶蘇のかゝれたものではない。たゞ其處に耶蘇の心からでなければあふれ出ない言葉や行ひが處々に片鱗を見せてゐる。それが實に恐ろしい。その深さとその權威にふれると心が自づと淸まつてくる。その前に跪づきたくなる。全然とは同感の出來ない言葉があつても、その深さには頭がさがる。その力は何處からくるか。其處が面白い處だ。俺は來世も復活も奇蹟も信じられなくも、耶蘇の心の深さには實に心の底を動かされる。その力は何處からくるか。その力に自分は自分の一生をまかせたい。それだけが自分の一生をさゝへてゐる心棒だ。それがなければ世の宗教家程くだらぬものはない」

師はその力を信じてゐられた。或日のことだつた。師は私かに自己の心のうちだけで盲目の目を信仰の力でなほさうとされた。そしてそれが失敗した時に、師は泣かれた。「自分は信仰の力で盲目がなほり得ると云ふことをまだ信じ切つてゐないのだ。それが信じ切れたら、盲目の目もなほらないとは思はない。だが自分は正直に云ふと耶蘇が盲目の目をなほしたと云ふことも信じられないのだ」

「それならなぜなほさうとされたのです」

「あまり可哀さうだつたから。父と子が五年の間わかれてゐた、子が五年ぶりで歸つて來た、その五年の間に父は盲目になつた。父は自分の子供の顏を見たいのをじつとこらへて涙ぐんでゐた。子は自分の顏や姿を父に見せられないのをたまらなかつた。俺はそれを見てゐたらつい父の目をなほしたくなつたのだ。だが俺にはその力がないことを知りすぎてゐた。しかし心でその目のなほるのを神にいのらないわけにはゆかなかつた。そして心で目をひらけと云つて見た。その時自分の權威のないことを實に露骨に感じた。自分を恥ぢ知らずだと思つた。そしてつい泣いた。二人に同情して泣いたのではない。自分の恥ぢ知らずなので泣いた。汝信仰うすき者よ。自分で自分にさう云つて、歸りに山の中で跪いて祈つた」

しかし師のこの祈が神にきかれたと自分は云ひたい。しかしさう云ひ切るのを師は恐れてゐられた。彼の父の目はその後まもなく見えるやうになつたのだから。醫者は不思議がつた。しかしまゝさう云ふ運のいゝ方もあるものです。と云つた。

自分は師にそのことを云つた時、師は

「その話はやめてくれ。俺にはそれは信じられない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com